

よか ネット

YOKANET

NO. 2

1993.3



宮地獄神社・奥の宮八社：全長23m、高さ・幅5m強。200年以上前に、約300点の馬具、刀装具と共に発見された地下の正倉院ともいわれる日本最大級の横穴式石室巨石古墳であり、古墳発掘を機に、不動神社として祀られている。

も く じ

○NETWORK・ネットワーク

2. 21世紀は知的インフラの時代
4. 障害者を持つ母親の現代の生活について
6. 都市住宅の定住について

○近 況

8. 知的刺激と知的ネットワークづくり
9. 「九州歴史街道」の成り立ち

○見・聞・食

11. 北九州景観
12. 富良野ワインの成り立ち
13. 手造り薫製体験記
14. 牛乳で煮るガンジー鍋

○本・BOOKS

15. 僕をさがしに

21世紀は知的インフラの時代
地域間競争は知的インフラで決まる

<日本の豊かさは何によって生まれたか>
現在の日本が、世界で最も豊かな国の一つであることは異存のないところであろう。もし、そのことにいろいろ注釈をつける人がいるとしても、この100余年の間に最も早いスピードで豊かになったことを認めない人はいないと思う。その理由について、私は次のように考える。

それは、①少なくとも指導層の間では、日本が植民地にされてはならないという意志の共有があり、早く近代化して富国強兵を図ろうとしていた(思想の共有)、②その上でとりかかった仕事は、法律・国民教育制度をはじめとする各種制度、治安、軍制などを整えた(ソフトなインフラストラクチャーを整えた)、③その制度にのって、ハードインフラを作っていた(港湾道路、郵便など)、④そして勤勉に働き工業社会を作り上げ、物的豊かさを築いた、ということである。

<知的インフラづくりを考える>

それをまとめると右図のようになる。図で示しているように、明治期以降われわれの祖先は、飢饉や恐慌などで食べる物も不足する時、「わが子を売る」というような話のある中で、多

くのインフラ整備をしてきた。

そして全国均質なインフラができる中で、近代化、産業振興のための、大変な努力によって豊かな日本が築かれた。その上にわれわれが今暮している。大変な苦勞が待ちかまえることを承知の上で移民のために先達が通った海路を、われわれは飛行機でレジャーを過ごすために越えていく。遊ぶことは悪いことではないが、それを肥やしにして、次の世代のために役立つインフラを準備しなければならない。

またそのため①目標を創造性豊かな日本をつくることに置き、②ソフトな手段としての多様なシステムをつくり、③ハードな手段としての研究施設・教育施設などをつくり、④多様な日本、世界と手をつなぐ日本をつくらねばならない。

その基礎となるのが、知的インフラ(自主的な判断で活動するボランティア型の知恵の増殖作用が起りやすい状況)。

つまり、都市機能、住宅及びその環境、遊びなどの消費活動も含めて、独創性を育てやすい、知的活動のしやすい、知恵の交流のしやすい風土)であり、21世紀の都市・地域づくりは、このことによって決まることになるだろう。

(糸乗貞喜)

明治と現在のインフラストラクチャーの比較

明治期

<目標・時代意識>

- ・植民地化されたくない
- ・近代国家をつくる

<手段・システム>

- ・藩の垣根をとってボーダレス化
- ・法体系の整備
- ・全国均質な教育制度、治安、軍制
- ・西欧科学・技術導入
- ・全国的殖産町村是運動（前田正名など）
- ・全国均質なシステムづくり

<手段・ハードインフラ>

- ・港湾、鉄道、道路などの運輸システム
- ・郵便、電話などの情報インフラ
- ・小・中から大学までの建設
- ・全国を均質化させるハードインフラ

<効果>

- ・人材、物の移動自由化
- ・高度な教育を受けた労働力
- ・産業立地の自由化
- ・全国的殖産振興
- ・工業立国の実現
- ・豊かな国の実現
- ・過疎・過密問題など不均等化・一極集中化

現代から21世紀へ

- ・世界の中の日本として役割を果たす
- ・創造的な文化・科学技術

- ・世界的ボーダレス化（国の垣根をとる）
- ・独創的な研究をすすめるシステム
- ・独創的な人材を育てる教育
- ・地域に根ざした全国的、国際的支援システム
- ・地域の特色を生かした研究体制
- ・地域の特色ある産業振興
- ・特色のあるソフトインフラ
(祭り、文化など)

- ・全国的航空網（空港）
- ・中型近距離航空システムの開発
- ・地域の特色を生かした大学・研究機関
- ・地域特色のあるハードインフラ、生活インフラ
(ex.住宅、レクリエーション、食事など)

- ・技術導入から創造科学へ
- ・地域での文化・科学・技術の振興
- ・全国各地からの情報発信活動
- ・各地をベースにした国際交流
- ・各地の特色ある発展
- ・一極集中問題の解決

障害者を持つ母親の現代の生活に
ついて

服部メディカル研究所
所長 服部 万里子

<地域福祉サービスの生かし方と育て方>

先日、ある保健婦さんの集まりで、地域福祉サービスについてのコーディネートについて話していた時に質問が出た。「メニューはあっても実際、使用できないサービスばかりである。」というのである。

一面ではうなずきながら、他面では、2つのことを考えていた。まず、最近の福祉サービスは月単位で変化していると言えるほど変わってきている。例えば福岡市の「在宅へのホームヘルパー派遣サービス」はまだ供給量の方が多く、充分欲求に応えられる。しかもかつてのようなヘルパー派遣を受けられる人の「収入制限」はとり払われている。また、鹿児島の人町のように365日の給食サービスを実施している地区もある。高負担高福祉の国と比較をしてサービスの内容や量に見劣りがすることは否定できないが、具体的に自分の町のサービスを調べると、まだまだ利用されていないサービスがあるということである。

そして次に考えたのは、お年寄りの望んでいるサービスを行政が与える・・・という図式はこれから通用しないのではないかと、ということである。老人ホームに入所したければホーム、入院したければ病院があり、在宅には24時間の各種サービスが提供されているというように、自分の望み通りのサービスがいつでも手に入る国は世界中どこにも存在していないと思う。

その人が自立してゆくためには、何が 필요한のか、どのような援助がどのくらい提供されれば自宅で生活することが出来るのか・・・を専門的に判断し、お年寄りに自立を促すカウンセリングや相談がしっかりと行われていて、初めてサービスが供給されるのが基本だと考えている。福祉サービスにはそのための資金と制度がある。高齢化社会は、いままで以上にその受け手の権利と努力が要求される社会だと思う。

この専門的、客観的な評価と自立を促すカウンセリングは、未だ日本の中では不十分である(と考えたのである)。

これから各市町村で高齢者や要援助者の介護に取り組む人々に求められているのは、入所施設やサービスの供給を増やしていくと同時に、限られたサービスが必要な人に、必要な内容で提供されるような「評価」システムを作り出し、していくことが大切だと思う。スウェーデンやデンマークとの比較においてヘルパーの数やサー

ビスの量が少ない。しかし、日本の福祉サービスの貧困は、そのメニューや量ではなく、アクセスの悪さや受け手の満足度評価、受けた者がそのサービスをどのように生かしていくのか、また、サービスの維持のための資金や供給の体制をどのように作り出すのかという点での蓄積が不足していることにある。

＜在宅介護支援センター＞

平成元年に出された保健福祉10ヶ年戦略の中で、在宅介護支援センターは各種福祉サービスと地域の要介護者を結ぶ情報コントロール、相談、手続き代行の窓口として登場した。平成4年8月末には、全国の30ヶ所に設置され、その8割近くが特別養護老人ホームに併設されている。最近の特別養護老人ホーム新設時には、併設することが「条件提示」されていることが多いようである。

センターは家で誰かが倒れたり、退院後に在宅介護が必要になった時に相談をし、適切なサービスが円滑に受けられるようにするための相談窓口であり、かけ込み寺的な役割を果たすものである。そこには看護婦やソーシャルワーカーが公費で配置されている。

しかし、残念ながら今のところ有効に活躍しているとはいえない。その理由はこのセンターが「相談を受けても決定権を持っていない、という制度上の弱点を持つ」ことや、相談を受け

る側のレベルの不十分さにもある。

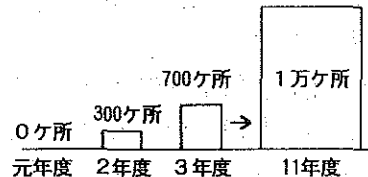
ゴールドプランではセンターは、中学校区に1つ、1万ヶ所設立の予定である。これからの地域福祉はこのような“サービスコーディネーター”機能が大きな意味を持つてくる。これをどのように生かしていくのが当面の課題である。作ることと生かすことは別の力が必要であろう。

在宅介護支援センター設置状況

平成4年8月12日現在

地域	設置数	設置場所				地域	設置数	設置場所						
		特養	老健	病院	その他			特養	老健	病院	その他			
北海道	6	6				横浜市	/							
東北・関東	111	87	11	10		川崎市	10	10						
東京近郊	73	68		2		名古屋市	1	1						
中部・北陸	124	95	15	13		1 京都市	12	8	2	2				
關西圏	107	91	9	2		5 大阪市	/							
中国・四国	133	89	22	13		9 神戸市	/							
九州・沖縄	138	103	21	12		2 広島市	6	5	1					
札幌市	6	4	2			北九州市	4	3	1					
仙台市	3	3				福岡市	/							
千葉市	2	2				合計	730	589	84	54			23	

◆ゴールドプランにおける目標数



都市住宅の定住化について
都市住宅の規模について考える

都市住宅とは、密度の高い都市に集まって住むことを前提として建てられる住宅であり、郊外の戸建て住宅と対比して考えられる住宅であります。

したがって、都市住宅とは戸建て、集合住宅にかかわらず、狭い敷地に立体的に工夫しながら、都市生活にマッチした家づくりを行うものであろうと考えますが、ここでは集合住宅における規模の問題について述べたいと思います。

＜都市居住の安定と良好なストック形成のための規模増の必要性＞

都市で安定した生活を営む条件には、交通の利便性、美術館やホールといった文化施設の魅力、リーズナブル（納得いく）な家賃や分譲価格、日照や採光などの居住環境など多様な問題が絡んでおり、一概に言えるものではありません。住宅の規模のみに限ってみた場合、将来の都市居住を安定化させるためには一定の規模をもった住宅を供給していくことも今後の大きな課題であろうと考えます。

国の第六期住宅建設五箇年計画においても、住宅ストック一戸当たりの平均専用床面積を・1995年に95㎡、2000年には100㎡という目標を

掲げており、公営住宅においてもその標準面積を毎年2.5～2.7㎡を目途に増加していく考えであり、良好なストック形成のために、まず規模増が大きな目標となっています。

＜住宅の規模はもっと柔軟に考えられないか＞

今、我が国で最も標準的な4人家族（両親＋子供2人）が家を選ぶ場合、立地条件（交通条件、校区、買い物利便性など）、価格、規模などが選択の大きな要因となりますが、例えば3LDKにするか、4LDKにするかについてはその世帯の求めるライフスタイルにり、お金の少し余裕のある世帯は最初から大きめの住宅を選ぶでしょうし、余裕のない世帯は少し我慢して小さい住宅を選ぶのではないかと考えます。将来的には広い住宅にこしたことはないのですが、果たして一生広い住宅が必要なのか考えると非常に疑問を感じます。

しかし、3LDKを選んだ世帯では2人の子供が就学期を迎え、2部屋が子供のための個室となった場合には4LDKと3LDKの差が大きく響いて、お父さんは居場所がなくなり、ただ帰って寝るだけの会社人間を助長することになるかも知れません。そして、子供が個室を持つのはせいぜい8年～10年（8才～18才）であり、将来子供と同居しない限り夫婦だけの生活となり、その部屋は空家化、倉庫化してしまいます。

そこで、当初から無駄な投資をせず、集合住宅における快適な暮らしを実現するため、この規模をライフスタイルに合わせて柔軟に考える必要があります。

<規模柔軟化の具体的な方法について>

そこで、ここでは規模の柔軟化を果たすため、例えば、一定のまとまった集合住宅の開発を行う場合、3LDKや4LDKの標準型の住宅のみを供給するのではなく、ワンルームを標準タイプとセットに供給（必ずしも一住棟内に収めないでも、近接していれば良いと考える。）し、3LDKに入居している世帯が必要に応じて、また、必要な期間のみ借りられるようにすれば、子供が就学期を迎えても、お父さんの書斎、あるいは奥さんの仕事の間、家族の趣味の部屋、倉庫など多様な使い方ができ、快適な都市居住が営まれると考えられます。

しかし、フレックスな部屋とは言っても部屋が離れていると実際使いにくく、また家族で使用する場合にはゆとりのある土曜とか休日に限られるので、共同で借りて趣味活動の場にするなどの、あるいはこのワンルームの部屋がI階の寄りつきのよいところがあれば各種教室（編み物、ピアノ、書道等）を開くなどの幅広い使い方も可能であろうと考えます。この教室的な使い方は多摩ニュータウン内の集合住宅で実際試みられています。

さらに、当集合住宅の立地条件が単身世帯需要の見込めるところであれば、このワンルームは単身世帯向けと併行して供給しても良いのではないのでしょうか。

<公営住宅についても規模増の柔軟な対応は考えられないか>

公営住宅は今まで仮の住まい、家族の成長課程における一時の居住の場という意識が強く、昭和30～40年代に建てられた公営住宅に残留している世帯は、生活困窮世帯といった積極的な意味での定住化でない層が多いと思われませんが、これからは公営住宅であっても、地域に根付いたコミュニティを形成していくためには積極的に定住する層を多くしていくことが大切であろうと考えます。

公営住宅も現在、規模増を毎年行ってきていますが、民間以上に規模を上げ過ぎることは問題であろうし、また、予算的にも限界があると思われるので、例えば公営住宅においても敷地の一部にワンルームタイプをもつ公社または公団住宅などを併設して建て、公営住宅入居者でも一定期間ならば公社・公団住宅を借りられるようにしたなら、良好なストック形成に対し、効率的で柔軟な対応ができると考えます。

(山田龍雄)

知的刺激と知的ネットワークづくり

今、全国の地域振興の動きの中で、もっとも新しいものが、地域の科学技術や研究開発の振興をキーワードとしたリサーチパークやリサーチコア、さらに学術研究都市づくりである。前号で紹介した九州北部学術研究都市は、この先がけとなる全国のモデルとして実現を目指している。

<ハコモノ的発想からコト重視へ>

社会のインフラストラクチャーには、その活動のための基盤として従来から行われてきたハードな施設づくりと、ソフト的な、システムや活動、組織づくりの2つがある。今、反省されているのは、何のためのハード、ハコモノなのか、ということである。そもそも、これらのインフラと呼ばれるものは、ある目的のための活動基盤であるが、施設や組織をつくること、目的に置き換えられてしまう傾向がある。しかし本来の目的は、地域の活性化であり、ここで行われる活動が最も重要なのである。

言い換えれば、「コト」を重視すること、社会の発展をリードする創造的な活動を起こしていくことが、その真の目的と言えよう。

<知的刺激のある環境>

社会の発展をリードする創造的活動には、地域の文化活動や芸術活動、学術研究活動など、時代の先端的な部分を探求する活動がその中心としてあげられる。これらの活動の多くは、個人あるいは個人の集まりであり、その人々の創造性、モチベーションに負うものである。そして、これら個人の創造的な活動性を高めるためには、それなりの社会環境が必要であり、中でも知的刺激（都市活動の最新情報や流行、「思い」を持つ人々の集まりなど）のある環境が重要である。この知的刺激が創造活動を支えるインフラであり、地域の創造的活動のポテンシャルを高めるものであろう。

<近世の九州のインフラ>

明治維新における九州、西日本の若者の活躍の要因の1つとしてこの知的刺激をあげることができる。九州が古くから外国の文化・文明の入口、最前線にあり、新しいものを受け入れ、これを吸収していく人材が育っていたこと、すなわち、知的刺激に満ちた環境と、これを支えるハード、つまり人が移動しモノが動き、情報が流れる「街道」があったためである。

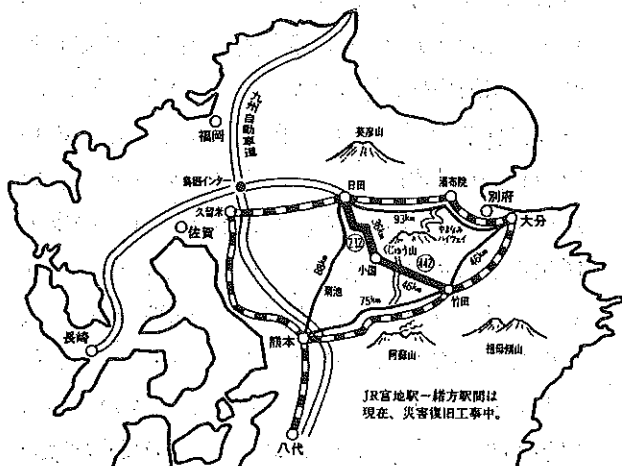
<知的ネットワーク>

この知的刺激のある社会環境は、知的ネットワークのある環境と言い換えることもできよう。今地域に求められているのは、社会をリー

トする創造的活動の組織あるいはセクターが、そのポテンシャルの向上と発揮のため知的刺激を得ながら、コトを起こす知的ネットワークを形成することである。

また、これは地域ぐるみで進めていくことが必要であり、地域が主体となって進めていくためのシステムが必要である。(山辺真一)

「九州歴史街道」の成り立ち



「九州歴史街道」の位置

(熊本日日新聞社作成資料を使用)

複数の市町村による合同の組織の運営、自治体と民間とのネットワークによる、広域的な地域づくり、これらの良い参考になるものに「九州歴史街道」があります。

熊本、大分県の市町村による「九州歴史街道」とは、豊後竹田の岡城を起点にする「岡城道」に始まり、西国郡代が支配する天領日田までの「小国街道」「日田郡代道」など、江戸時代に九州中央部の要所を結んだ街道を基にした、久住、阿蘇山の間広がる高原を抜ける約80のルート(現在の国道442号と国道212号とほぼ一致する)を広域観光道路として新たに蘇らせようというもので、沿線上の熊本・大分県2市4町1村をつなぐシンボリックな存在とも言えます。これら沿線上の市町村には黒川温泉(南小国町)、杖立温泉(小国町)などの全国的にも有名な温泉や、ガンジーファーム、緑美しい久住高原、全国名水百選にも選ばれている池山水源(産山村)など、豊富な観光資源があります。また、この地に縁のある文人や学者などの偉人、日田の私塾「咸宣園」を開いた広瀬淡窓、竹田市の岡城址「荒城の月」で知られる瀧廉太郎、「続千羽鶴」に久住町の法華院温泉を取り上げた川端康成などがいます。

街道の成り立ちを簡単に述べますと、コトの起こりは、南小国町が地元の温泉(黒川温泉)による地域おこしグループと熊本日日新聞社と

近況で企画した、「町づくりウオッチング&プロポーザル」(昭和63年の「ふる里創生一億円」の使い道を考えるための企画。熊本大学などの教授、学生に2泊3日で町を回ってもらい、その後町づくりの提案をしてもらおうというもの)に始まります。ここで企画の中心となった熊日新聞社のS氏と、黒川温泉のM氏は、地元の優れた景観を生かすためにも、町を超えた市町村での広域観光の必要性を認識したといいます。そしてそのための周辺市町村をいかに結びつけるのかを考える中で、それまで地元の人にも殆ど知られていなかった「日田郡代道」などの三街道をわずかに残る石畳や松並木から発見し、その結果生まれたのがこの街道ネットワーク構想という訳です。

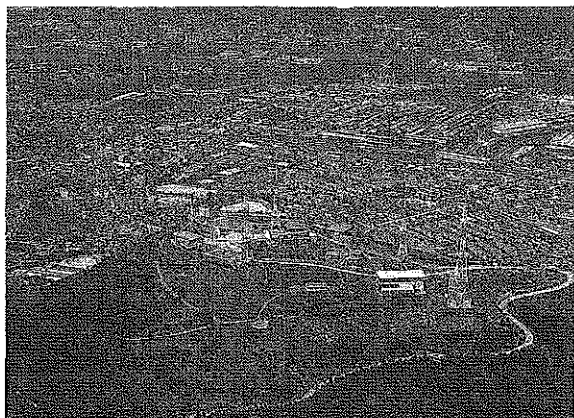
この構想の実現のため、地元の観光協会の副会長でもあるM氏は他市町村の温泉旅館への呼びかけ等、民間の観光ネットワークの強化につとめ、またS氏は企画書をつくり、精力的に各市町村を回ると共に、大分合同新聞にキャンペーンを持ちかけるなどのバックアップ体制を固めていきました。しかしここまでにも数年の年月を要し、また大分・熊本の県境をまたがる市町村での取り組みのため、行政面での問題など多くの困難もありましたが、ついに平成3年4月委員会の立ち上げとなり、まず共同イベントとして、先の南小国町の「町づくり～」の広

域化したものを行いました。その後も大分・熊本両県民からのネーミングの募集やフォーラムの開催など、地元有力紙のバックアップという利点を生かし、まずは知名度を広げるための広報を兼ねた活動を行っています。

今後の予定としては物産フェアや、「ウォッチング～」で提案された新祭り創生実現に向けて、両県民からアイデアを募集することです。活動費用は官民が自主的に出資するものとし、実際には各市町村がそれぞれ年間110万円ずつを出して活動資金にしています。さらにこの「九州歴史街道」は現在、九州建設局における広域共同プロジェクトに取り入れられ、道の駅構想やポケットパーク、デザインマークのサイン化などのハード部門の整備に、今後6年間で230億円の予算が予定されているそうです。

この構想は「久住山、阿蘇山から見るこの地域の景観は九州一だ」という地域の人々の想いから生まれたものです。またS氏は「この街道構想を高千穂まで拡大したい」とも語っていました。まず人の想い、積極的な行動があって、その後道路整備などのハードがついてくる。見本といっってはなんですが、地域づくりの一つの理想であるように思います。(北村茂樹)

北九州市都市景観
「360度パノラマ景観・皿倉山」



「北九州の公園」より

北九州市の中央部よりやや西側に位置する皿倉山は、北九州市のシンボリック的存在の山であり、標高622mの雄大な山並からは、洞海湾一帯をはじめ、北九州市域のいたる所からもその姿を見ることが出来る。

周辺には皿倉山の他に、帆柱山、花尾山、権現山等の山々が集まった緑豊かな山地が広がっており、これらは北九州国定公園、北九州自然休養林にも指定されている。このように、大自然の恵み豊かな皿倉山は、帆柱自然公園として市民に開放されており、市民の憩いと安らぎの場となっている。山頂までは遊歩道が整備されており、自然の樹木や草花など森林浴を満喫し

ながら山を登ることが出来る。

今回はケーブルカーで登ることにしよう。このケーブルカーの名前は「帆柱ケーブル」といい、赤と緑の2台のケーブルカーが交互に上下する。麓の山麓駅から山上駅までの所用時間は7分で最大傾斜度28度の斜面をゴトゴト登っていく。徐々に上がるにつれて、下界の八幡の街や工場地帯の煙突が見えてくる。野鳥のさえずる森林の中を「皿倉号」はひたすら力強く登っていく。

山上駅に到着、さすがに麓に比べてひんやりとした感じであるが、空気が澄んでいて陽射しが眩しいくらいである。駅の屋上からはリフトが山頂まで続いており、所用時間3分である。ここからはリフトを使わず遊歩道を登ることにする。石段を上がっていくと中ほどに「野口雨情の詩碑」が立っており、帆柱山の伝説についてうたっている。この他、「北原白秋の詩碑」等もあり、このような文学に親しみながら石段を上っているうちに山頂にたどり着く。山頂は、テレビ局の中継塔が林立していて、展望台や売店、東斜面の緩やかな広場が続いている。展望台からみる景色は、北九州市域が一望できる。若松の先の玄海灘や関門海峡、周防灘まで眺望することができ、360度のパノラマ景観をとおして新たためて北九州市が緑の山や海に囲まれ地形的に優れた都市であることに気づかされ

た。そして夜になれば、このパノラマ景観はダイヤモンドをちりばめた様な美しい100万ドルの夜景に姿を変えるのだ。

また、この皿倉山では、パラグライダーによる国際選手権等も行われている。国際都市を目指す北九州市としても（このパラグライダーの様に）、上昇気流にのって優れた都市景観を目指して発展してもらいたいと思う。

（宮原真一）

富良野ワインの成り立ち

やや古い話になりますが、北海道の富良野を訪れる機会があったので、報告します。

「富良野」は、テレビでも話題になった「北の国」の舞台で、人口約27千人の都市です。都市とは言っても、北海道特有の広大な平地にあって四方を山々に囲まれており、これらの山の斜面で冬はスキー、夏はラベンダーなど、全国レベルの有名な観光地になっています。

夏場の観光客は、7月～8月で30万人に対して、冬場は1～3月で100万人を超え、年間を通じて約200万人近い人々が訪れています。

（ふらのワインづくり）

北海道では、いくつか全国で名を知られてい

るワインがありますが、その1つにここの「ふらのワイン」があります。

昭和34～35年の頃、葡萄、玉ねぎ、人参など、盛んにつくられた農産物は生産過剰によって価格が低落しました。そのため、これらの産物に加工によって付加価値を付け、商品として販売するための対策が行われ、これをきっかけにワインづくりの研究が始まりました。

そして、ワインづくりを専門に研究するワイン研究所が46年につくられ、51年には生産工場、そして、地元でワインを楽しんでもらおうという「ワインハウス」が54年につくられました。このワインハウスの1年前に「ふらのワイン」というブランドで販売がはじめられています。

そしてこの収益は年間約2億円、振興公社の事業の大きな柱となっています。

（経営の多角化と職員のやる気）

この公社では、ワインだけでなく、いくつかの事業が行われています。宿泊施設と温泉を持つ「ハイランドふらの」、夏季には、この施設が立地する敷地の一角にあるラベンダーの森の中にバーベキュー広場、また別の場所で「ふれあいの家」等、公社収益の柱となる事業がいくつかあります。

各事業部ともに独立採算が目標とされており、職員のサービス意識の向上、職員のやる気の出る経営を目指して事業が行われています。

季節による利用客数の変動の大きさによって、業務量の増減が激しいため、公社では、これをなんとか平均化するための各季節の目玉づくりを目指した経営が行われており、また、民間企業に負けないだけの力をつけることを目標としています。(山辺真一)



手造り薫製体験記

去年の夏に、海水浴を兼ねて初めて薫製なるものに挑戦しました。実際に造る前は難しいのではないかと考えていましたが、材料と道具と

場所さえあれば、極めて簡単であり、美味なることこの上なく、ビールのつまみに最高であります。

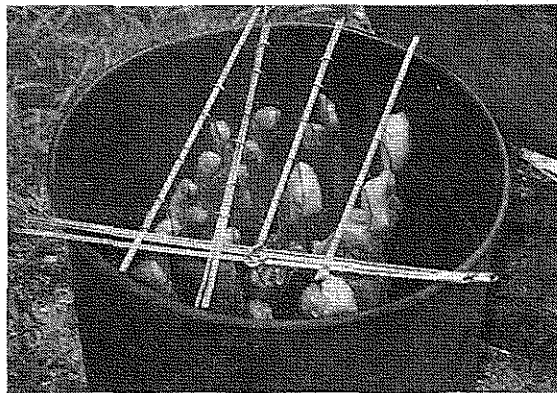
毎年、夏になると、このビールのつま味を思い出し、造りに出かけることになりそうです。

造り方は、牛肉、鶏肉、鮭、ソーセージ(糸島の手造りもの使用)、蒲鉾、チーズなど食べたい材料を漬け汁(ワイン、玉ねぎやレモンのスライス、にんにく、とうがらし等)に一晩漬けておき、これをドラム缶にぶら下げ、煙で1~2時間程燻す。(チップは東急ハンズから買ってきた桜のチップ)

また、材料によって燻す時間が異なり、牛肉なら1時間程度、鮭ならば30分程度で十分美味しくいただけます。

失敗談としてチーズを燻しすぎて、溶けてしまい食べられなかったことがあり、今も悔やまれます。

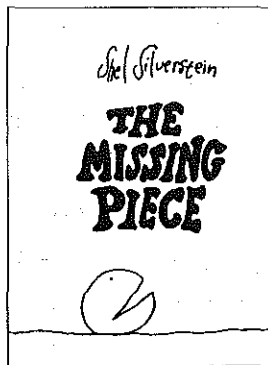
(山田龍雄)



何か足りない それでぼくは楽しくない
足りないかけらを 探しに行く
ころがりながら ぼくは歌う

(本文より)

僕をさがしに



シルバスタイン

倉橋 由美子訳

(講談社)

この本は、絵本のようにもあるし、童話のようでもある。小説、いやこの本を読んだ人自身の小説を書く題材ともなり得るようなものもある。読んだ人それぞれに感じ方も、見方も違い、また同じ人が読んでもその時の心境や境遇で違った感じ方ができるそういった、不思議な本だ。と私は思う。

この本を読むと私は、なぜか何となく悲しい気分になったりする。不完全な自分が完全な自分になろうとして旅をする。今の生活ではそう簡単に旅に出るわけにはいかないが、1日24時間、わりと決まってしまった生活範囲の中で、

私は私なりに自分を見つけようとする。時には今の生活が無償にいやでいやでたまらなくなったり、ほんの少しの発見でうれしくなったり…(こんな時私は単純な人間で良かったな、とつくづく感じる)。まだまだ私は、発展途上であり、自分自身がよくわからない。そしてこの本の結末もまた、決まっていない。残りのページが少なくなると、「自分を見つけることがどんなに難しいことか」「なあんだ、そんなもんか。」「人生っていろいろよねえ。」などの、いろんな感情が溢れ出てくる。そしてその時には辛い気分になったりもする。

この本の主人公は名もなければ、何という生き物なのかもわからない。これは自分なんだと思って本を読んでも何かが見えてくる、というか、何かを感じることができると思う。

この本には続編「ビッグOとの出会い」というものがある。こちらも「僕をさがしに」とは違う出会いがあるはず。機会があったら、ぜひ読んでいただきたい一冊である。

最後に、未熟な私、いろいろ悩んだり、傷ついたり、うれしかったり…やっぱり日々の試行錯誤が人生を楽しくしてくれると思う今日この頃である。

(神野みつえ)

●「よかネット」という名前は、「よか」という全国区で通用しながら、九州全域共通の方言でもある言葉に着目したものです。「ネット」はもちろんネットワークのことです。つまり地方色を大切にしたいネットワークづくりを目指したいという気持ちを込めました。先日九州のさるところへ行って、一泊の会議とパーティに出てきたのですが、夜のパーティは洋食だったし、翌日の昼もフランス料理みたいなものだったので閉口しました。私のようなフランス料理などの賞味能力の無い者には、日本のその土地のものを出して頂く方がありがたい。なぜ地元料理を出してくれないのか不思議な気がします。夜のパーティのあと街に出て、少しだけ地元の味に触れました。「はじめからこの料理だったら…」というのが全員の感想です。少しオーバーに言うと、人生の後半に入って、あと何回メシにありつけるかと思っているときに、高い旅行費用と時間を費やして、土地柄と結びついた味にありつけるチャンスを1回逃したようでゲンナリでした。いよいよ土地柄を大切にしたいと思った次第です。(い)

よかネット NO. 2 1993. 3

(編集・発行)

(株)九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-1 日之出ビル6F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-767

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所

大阪事務所

名古屋事務所

東京事務所

(株)服部メディカル研究所

(株)地域づくりネットワーク

(株)地域総合プランニング研究所

(株)未来プラン

TEL 075-221-5132 FAX 075-256-1764

TEL 06-942-5732 FAX 06-941-7478

TEL 052-962-1224 FAX 052-962-1225

TEL 03-3226-9130 FAX 03-3226-9560

TEL 03-3465-3147 FAX 03-3469-4388

TEL 06-357-2725 FAX 06-357-2740

TEL 092-714-5297 FAX 092-714-5298

TEL 092-722-0220 FAX 092-722-1391